

式 辞

春の風が日ごとに暖かさを増し、穏やかに桜の花びらが舞う今日の日よき日、ご来賓にPTA会長 森口英司 様をお迎えし、令和4年度島根県立矢上高等学校の入学式を挙げてまいりますことを、衷心より感謝申し上げます。(礼)

ただ今入学を許可しました95名の新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。教職員一同、心より皆さんの入学を歓迎します。

さて本校は、昭和23年、矢上の地に、ぜひ高等教育の場を、という熱い気持ちと、町民の奉仕により、創立されました。高校設立にあたり当時の町民は「ご飯や漬物は家で教えられる。農業をするのに学問はいらない。」などで否定的であったと聞いています。しかし、地域の発展は、人づくりであるという方々の根強い説得により、町民が矢上高校創立という大事業に着手することになりました。しかし、当時の島根県は財政難で、高校の建設は考えていませんでしたが、「校舎は地元負担で建設し県に寄付する」という条件を了承し、認可にこぎ着けました。

矢上高校の土地を提供した植田友太郎は、

「私たちはどんな犠牲を払っても矢上高校をつくる大
事業を成し遂げねばなりません。子孫のために残すのは
これ以上のものはないのです。そのために毎日1時間以
上余計に働こうではありませんか」という言葉のもと、町
民総出で敷地の整地作業を行いました。さらに校舎建築
の木材の伐採と運搬も町民の奉仕によりなされました。
こうして矢上高校は 校歌にもありますように、愛と奉仕
に営みなれたのです。

皆さんにとって、高校の歴史はどうでも良い話かもし
れません。しかし、敢えてお話したのは、他校のように、
県の施策や整備により作られたのではなく、町民が町民
の意思と手により、地域の将来のために作った、他には無
い、素晴らしい誇りある学校の歴史があるということをし
知っていたただきたかったからです。

私事ですが、私自身も40年前に矢上高校で学び、その
歴史について、ことあるごとに先生から話を聞かされま
した。小さな高校ですが、このような歴史を持つ矢上高校
は、私にとって大きな誇りです。皆さんも矢上高生として、
この歴史と伝統を受け継ぎ、新たな歴史を築いて欲しい
と思います。

「腕に覚えのある人間」

「筋金の通った人間」

「思いやりのある人間」

これは初代校長 岡磯吉 の言葉から始まる本校の校訓です。74年も前の言葉ですが、今も色褪せることなく私たちの目指すべき姿が示されています。

コロナ禍に加え、連日伝えられるウクライナ情勢が、私たちの心を痛めます。一刻も早い収束を願わずにはいられません。先行きの見通せない社会状況ですが、校訓が示すような、自分の良さや個性を磨き、何事にも動じず、地域や社会に貢献できる、力強く暖かい人間になつて欲しいと思います。

皆さんが過ごしてきた中学時代は、コロナ禍のため数々の制約の中での生活であったと思います。

この状況はしばらく続くでしょう。

新しく高校生活の一步を踏み出す皆さんには、制約の中で「コロナとの付き合い方を自ら考え、感染を防ぎながら、何かに挑戦する意思」を持って欲しいと思います。

矢上高校には皆さんの「挑戦」を後押しする、様々な感性を持った先輩や教職員、そして地域の人たちがいます。色々な人たちとの出会いを通し、自分を知り、人を大切に、自分を磨いてください。

最後になります。保護者の皆様、本日は誠におめでとうございます。（礼）

この4月から法改正により18歳で成人を迎えることになりました。これからの高校での生活は「大人」になるための最後の成長の場となります。青春の真っ只中、時には悩み、苦しむ時もあると思います。

学校と家庭が、それぞれの役割を果たしながらも、連携を深め、お子様を支えて行きたいと思えます。

どうか 本校の教育活動推進に、ご理解を頂きながら、ご支援ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

3年後、矢上高校に行つて良かった、行かせて良かったと思つてもらえるよう、教職員一同 精一杯 教育に当たつてお誓いし 式辞といたします。

令和四年四月九日

島根県立矢上高等学校長

駒川 一彦